2016年(H28年)
9月
No. 300

ひとはつうしん

(ホームページアドレス) http://hitoha-fukushi.com
(メールアドレス) honbu@hitoha-fukushi.com

社会福祉法人 ひとは福祉会
〒739-1203
広島県安芸高田市向原町長田1857番地
TEL (0826) 46-2960 FAX (0826) 46-4355

7月26日、神奈川県相模原市にある津久井やまゆり園で起きた知的な障がいのある人たちの殺傷事件は、まだ大きなとげとして私たちの心に突き刺さっています。

特に犯人をして殺傷に至らしめた動機の中に、重い障がいのある人たちを社会の役に立たない劣等な人だと位置づけていることです。

ひとはは、「誰でもが共に暮らせる社会」を目指すことを運営理念に掲げています。なぜなら、障がいのある人たちの文化は、私たちの社会が共に生きるという共生社会を目指すとき、なくてはならない協働の文化としてなくてはならないものであることを、実践を通して確信しているからです。私たちは、自らが自分らしく生きるために、自らが生み出す文化として、自生文化と名付けています。そしてお互いに協働してこそ、人としての価値を見出すことができるという立場から「仲間」と位置付けています。

ひとはでは仲間の声を編集した『お～い、聴こえますか(¥500)』とひとはの実践を記した『ゆたらかに(¥1,500)』を発刊しています。すでにいろんな人たちが読んでくださり、共感をいただいております。ぜひとも読んでみてください。

今回の殺傷事件の背後に、私たちの心根にあきらめ根性、見てくれ根性、抜け駆け根性に加えて我利我利根性が根付いているとすれば、その心根を抜き去るためには、仲間たちの声を聴くことが一番のように思います。

ご連絡いただければ、直ちにお届けさせてもらいます。

(理事長 寺尾文尚)

～ひとはつうしん300号に寄せて～

私にとって毎号届けられる「つうしん」は、仲間のくらしや支援をより豊かにするために努力されている日頃の実践をさりげない言葉とセンスある表現で伝えていて、楽しみです。

紙面を飾っている楽しいカットが親しみやすく、何よりもすべての漢字にルビがふってあること。

「ひとは」での仕事や仲間との交流、出来事が語られている姿がみえるようです。

「300号」を出してきたわけですから「ひとは」の30年の歴史でもあるんですね。

いつまでも順子さんが書いていると思っていたら、何人もの方にリレーされていると聞きました。

99人の楽しみに待っている読者(だけでなく支援したい思いを持っている方)のためにも「手書き」の良さを続けてください。

(西川 洋一)

積み重ねが功しての30年。300号で「継続は力なり」を実感します。

まずは続けることこそ伝統文化を守る、文字(文章)による伝える行為こそがその第一歩であることを肝に銘じ、これからも共にがんばりましょう。

(大土山田楽団 代表 川森泰彦)

「ひとは」の日々の情報を継続的に提供いただき、感動と勇気を与えられています。

仲間・スタッフの皆様、これからも頑張ってその姿を通信を通して教えてください。(重藤剛介)

後援会の方より99歳のコメントを頂きました。いつもひとはを応援してくださりありがとうございます。

作業所・かすみそうは、午前の活動で作業所廊下の掃除を行っています。
廊下にはクーラーがついていないので、作業所フロアのドアを全開し、扇風機2台使って冷風を送っています。
なかなか涼しくならず、掃除をしていると汗だくになってしまいます。まだまだ暑いので、皆さん扇風機から吹き出る冷風が恋しくて恋しくて…。
休憩にでもなれば扇風機の前は争奪戦です(笑)。
玄関から入ってくる風が心地よくなる秋が、と～っても待ち遠しいです。

（ひとは作業所 かすみそう 鈴川容子）

ひとはのタマ

就労センターあっぷのYさんとはアニメ好き仲間です。番組改変時期になると、新番組情報を必ずメールで教えてくれます。そのおかげで面白そうなアニメをチェックして、見逃すことなく楽しめています。
Mさんは毎日1回はメールをくれます。映画情報やMさんが買ったお気に入りグッズなどを教えてくれます。今日も元気なんだなと思えホッとしたりします。
Tさんとは皆勤賞を5回とったら、ご褒美にご飯を食べに行きます。いつもはTさんのリクエストのお店ですが、前回は私の行きたいお店に行き、「初めてだけど来てよかった」と言ってもらいました。
私にとっては、3人は大切な友人です。

（くらむぼん 升田和世）

今年のひとはまつり、無事に終了しました。

毎年、天候に悩まされるひとはまつりですが、今年は自称雨男の筆者がひとはまつり事務局の責任者をやらせてもらったものの、雨が降ることなく盛大に終了することができました。
ひとはの仲間達が中心となってのひとはまつり、そこに至るまでにはもちろんたくさんの協力が必要です。今年のひとはまつりには、悪天候を吹き飛ばす程の力があったのだと思います。
地域の皆様、ボランティアに来ていただいた皆様、ひとは関係者の皆様、そして来場していただいた皆様に深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

（第15回ひとはまつり実行委員会 事務局）

行事予定 9月～10月

日	月	火	水	木	金	土
31 ささき亭	12 ひとは館休み 休み	13	14	15	16 あじさい横丁（クリスタルアージョ）	17 メリイハウス秋祭り（八千代町） アロマ入門講座（ささき亭）
18 ささき亭	19 敬老の日 休み	20 ひとは館休み	21	22 秋分の日 テゴテゴマルシェ（吉田町）	23	24
25 ひとは館マルシェ ささき亭	26 ひとは館休み 休み	27	28 トールペイント教室（ささき亭）	29	30	10/1 吉田病院祭（吉田町） 安芸高田市いちおしフェア（ゆめタウン高陽）
2 安芸高田市いちおしフェア（ゆめタウン吉田） ささき亭	3 ひとは館休み 休み	4	5	6	7	8
9 白木の郷祭（白木町） ささき亭	10 体育の日 休み	11 ひとは館休み	12	13	14	15

社説

ronsetsu@mainichi.co.jp

障害者施設襲撃

痛ましさに言葉を失う

相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で働いていた26歳の元職員の男が夜中に施設を襲撃し、ナイフで入所者を次々と刺し、19人が死亡し、26人が重軽傷を負った。

刃物による殺傷事件の犠牲者数では戦後最悪だ。

数十分の間に多くの人が被害に遭った。無差別だったとみられる。被害者は重度の障害を抱え介護が必要な人たちだ。夜間でもあり無防備、無抵抗だっただろう。あまりに残忍で冷酷というほかない。

被害者の感じた恐ろしさ、突然命を絶たれた無念さを察すると、痛ましさに言葉を失う。

男は自ら警察に出頭し、逮捕された。「障害者がいなくなればいいと思った」と供述しているという。

同園は神奈川県が設置し、社会福祉法人「かながわ共同会」が運営している。知的障害者ら149人が入所していた。

男はハンマーでガラスを割って侵入したようだ。事件当時、夜勤職員8人と当直の非常勤警備員がいた。居室は原則無施錠だったというが、防犯体制は十分だっただろうか。

障害者が多数入所している以上、いざという時に職員を含めた周辺が支え助ける仕組みは不可欠だ。

犯行の態様は十分に分かっていないが、男に結束バンドで縛られた職員もいたという。周到な計画性がうかがわれる。事件当時の状況をしっかり調べ、今後の対応に生かさなければならない。

男は今年2月、衆院議長公邸を訪れ、「障害者総勢470名を抹殺することができます。職員の少ない夜勤に決行致します」などと書かれた手紙を渡そうとしていた。

男はその直後、施設職員にも「重度障害者を殺す」などと話し、警察の事情聴取を受けていた。

結局、医師の診断の上、行政命令で入院させる措置入院とされ、施設を退職していた。措置入院の際は大麻の陽性反応も出たという。ただし、3月初旬には入院の必要性がなくなったと診断され、退院していた。

退院させた病院の判断は適切だったのか。入院のきっかけとなった犯行予告も踏まえ、男の退院後も警察や施設は十分に連携し対処していたのか。検証が欠かせない。

動機については、軽々に判断すべきではない。男の言い分をうのみにすることもできないだろう。捜査や今後行われるであろう精神鑑定を通じて事件に至る経緯を解きほぐしていくしかあるまい。

事件を受け、塩崎恭久厚生労働相は、職員2人を現地に派遣し、再発防止策を検討すると述べた。この際、障害者施設の運営上の課題を十分に点検すべきだ。

書籍ご購読へのお願い

このたびの津久井やまゆり園で生活している人たちへの殺傷事件は、心底ふるえあがるような大変な事件でした。なぜこのような事件が起きたのかは、今後の解明を待たなければなりませんが、一つだけ言えることは障がいの重いといわれる人たちを「物言えぬ人たち」あるいは「弱者」としてとらえ、保護の対象にしか見ていない私たちの社会の傲慢さが根底にあるように思われて仕方ありません。

私たちひとは福祉会では、知的な障がいのある人たちは、自らが自分らしく生きるための発信者としてとらえ、私たちの社会の一員としてその文化、思想を通して私たちの社会が共生を軸とする社会になるために貢献している人材としてとらえています。

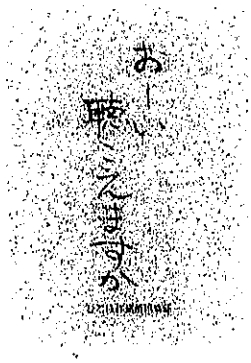
その実践は、「お～い、聴こえますか」「ゆたらかに」という小誌を通して社会にも発信してきました。

その活動は微々たるものですが、それでも知的な障がいのある人たちは決して弱者ではなく、適切な支援を受けることによって堂々と自らの人生を生き抜き、一人の人間として自らの尊厳をうたい上げています。

あえて皆さんにお願いします。ぜひとも「お～い、聴こえますか」「ゆたらかに」を手にして読んでください。

きっと知的な障がいのあるといわれている人たちが、ただの人間として、自分らしく生きている姿を感じていただけるものと確信しています。

もし、お読みいただけるなら、下記料金でお届けさせていただきます。（送料込）



『お～い、聴こえますか』
単価　５００円

『ゆたらかに』
単価　１，５００円

【お問い合わせ・ご注文先】
〒７３９－１２０３　広島県安芸高田市向原町長田１８５７
社会福祉法人　ひとは福祉会内　ひとは後援会事務局
電話　０８２６－４６－２９６０　ＦＡＸ　０８２６－４６－４３５５
Mail　honbu@hitoha-fukushi.com

書籍注文書

ご注文	お～い聴こえますか（　　）冊、　ゆたらかに（　　）冊		
お名前・事業所名		注文日	平成　年　月　日
ご住所	〒		
ＴＥＬ		ＦＡＸ	
Ｍａｉｌ			

※商品と一緒に振込用紙を同封いたします。

迦羅々塾　**真宗講座**　緊急企画

福祉と真宗

『障がい者が　いなくなればいい』との供述に頭をかかえた

寺尾文尚さんが お坊さんと 語り合う

相模原市障がい者施設 襲撃事件 を ともに考える

私の出逢った知的障がいのある人たちの問いかけは、奥が深い。
それはその人その人の人生経験の中から、生きづらさを通して、それでもなお、自らの尊さを叫んでいる。大げさに言えば、「絶望を通しての尊厳」とでも言おうか。それには迫力がある。
ただの喜びではない。ただの悲しみではない。ただの怒りではない。そこにはいつもすべての属性を払い捨てたひとりの人間が存在している。私は、その人たちのおかげで、自問自答する癖が身に付いた。
（これはある意味非常にしんどいことでもあります。なんせ、自分のこじ付け、言い訳、卑怯さ加減がぜ～ぶ見透かされるのですから）　寺尾文尚さん著「ゆたらかに」より

親鸞聖人のみ教え「御同朋御同行」の精神を支柱として社会福祉活動に取り組んできた寺尾さんが、頭をかかえました。それを伝え聞いたお坊さんが、遅ればせですが、頭を悩ませました。
それでは、同じ『悩ましさ』を持つ仲間が語り合い、道を探ろうと、この企画が実現しました。
社会福祉はいわば『人間学』でしょうし、真宗は人間を含めた『いのちへの願い』をテーマとしています。「いなくなればいい」という供述の背景にある「人間（現代人）の悩ましさ」に焦点をあててみます。ご来場をお待ちしています。　合掌

プログラム

①追悼法要（広島から）

②想い‥寺尾文尚さん

③真宗者への問いかけ　藤井聡之（塾生）

④福祉と真宗との対話

■開催日時

10月7日（金曜日）

14：00～16：30

■会　場

本願寺 広島別院 共命ホール

参加費1000円
ひとは福祉会への
支援金として活用します
当日受付にて

お問い合わせ
迦羅々塾　事務局（信楽寺）　0823-84-2375
社会福祉法人　ひとは福祉会　0826-46-2960